

1978年度／昭和53年度（昭和53年4月～昭和54年3月）



役 員

部長：阪埜 光男
師範：清水 正一、清水 直臣、安藤 勝英
橋本 昇、青木 豊次
監督：山際 正明
主将：植松 修一
主務：堀江 伸也
副将：佐藤 隆夫
体育会常任委員：忍足 正彦、山下 隆司
副務：森田 正利、相馬紳一郎
日吉高コーチ：羽鳥 信
志木高コーチ：小田切祐治
普通部コーチ：三木 崇嗣
幼稚舎コーチ：高輪 真澄
月次係：松本 司
合宿所主務：平川 典利、近藤啓一郎

125周年に寄せて

植松 修一

慶應義塾体育会柔道部創部125周年を心からお慶び申し上げます。

昭和54年に卒業して以来23年がまたたく間に過ぎてしまいました。当時を振り返って見て、人生で一番楽しく充実した期間を、諸先輩や仲間達のおかげで、有意義に過ごせたことが、鮮明に記憶されております。特に私の場合、1年生時より、日吉の合宿所にお世話になり、先輩方の乱暴でありながら実は親身になったご指導を賜り、逞しく、力強く生きる術を、会得させて頂いた事を、深く感謝しております。お陰様で留年もせず、無事に卒業出来、現在も、逞しく、且つ力強く生きてこられたと思っています。

125周年にあたり、何を書いて良いのか、適切な言葉が見つかりませんので、当時、心残りであった事を書かせていただきます。それは組み手に対する工夫です。当時、私の組み手に対する考え方は、自分の得意技を出すために、自分得意な形に持ち込む事でした。間違った考えでは無かったと思いますが、此にこだわりすぎて、技の出るタイミングが遅くなり相手に反撃させる猶予や、逃げる暇を与えていたように思われます。逆に相手に技を出させず、受けにくくする発想に欠けて居ました。つまり自分得意な形になって技をかける練習では無く、相手が不十分な体勢な時に、技をかける練習をするべきだったと。

投げられまい、負けまいという気持ちが強すぎて、きもちが守り向きすぎていた気がします。全国から優秀な選手が集まる大学柔道ともなると、一部の優秀な者を除いては、技量、体力共に、そう差は無いと思います。もし差が出来るとすれば、工夫と、これを実行する気力の差であると思います。

この点を、1年後輩の高木啓一郎君が実行していたと思います。彼は先に、先にと抜かれるタイプでは無かったと思いますが、組み手の争いの中で、相手のいやがる形に巧みに陥れ、あせつて動く所をうまく取って居ました。

まとまりのない言葉になってしまいましたが、塾柔道部の更なる発展を願い私寄稿とさせて頂きます。

試合記録

■第17回 東京学生柔道体重別選手権大会 昭和53年4月16日 講道館

1回戦	森田 正利	3年	合せ技	○	藤木	東洋大
1回戦	会田 義之	2年	上四方固め	○	栗原	立大
1回戦	三木 崇嗣	3年	外巻・返し技	○	大野	学芸大
1回戦	平川 宏之	2年		⊕	小泉	学習院大
2回戦	平川 宏之	2年	背負投げ	○	藤野	拓大
1回戦	羽島 信	3年	不戦勝		川村	上智大
2回戦	羽島 信	3年	背負投げ		重松	東洋大
3回戦	羽島 信	3年	袈裟固め	○	西田	国士館大
1回戦	千葉 武	2年	小外刈り	○	仲村	国士館大
1回戦	高木啓一郎	3年	合せ技		斎藤	学芸大
2回戦	高木啓一郎	3年	体落し		中根	帝京大
3回戦	高木啓一郎	3年	背負投げ		後藤	日大
準決勝	高木啓一郎	3年		⊕	田坂	大東文化大
1回戦	鈴木 武	2年	横四方固め	○	郷田	中央大
1回戦	植松 修一	4年	大外返し	⊕	大久保	駒大
1回戦	立山 由生	3年	注意		堀江	法大
2回戦	立山 由生	3年	三角絞		葛山	明学大
3回戦	立山 由生	3年		⊕	仲村	国士館大
1回戦	近藤啓一郎	3年	内股	○	樋下	国士館大
1回戦	鈴木 和史	3年	合せ技	○	鈴木	東海大
1回戦	佐藤 隆夫	2年	内股	○	村木	日体大
1回戦	加藤 益夫	2年	袈裟固め		高林	明学大
2回戦	加藤 益夫	2年	手内股	○	山本	東海大

■第27回 東京学生柔道優勝大会 昭和53年5月14日 日本武道館

1回戦	シード					
2回戦	本塾	6	-	0	工学院大学	
	羽島 信	3年	○	合せ技	西浦	
	立山 由生	3年	○	内股	日向	
	高木啓一郎	3年	○	払腰	長谷川(慎)	
	忍足 正彦	4年	○	体落し	小泉	
	佐藤 隆生	4年	○	縦四方固め	石川	
	植松 修一	4年	○	内股	長谷川(泰)	
	近藤啓一郎	3年		引分け	渡辺	
3回線	本塾	0	-	4	東海大学	ベスト16・1部
	羽島 信	3年		○	平瀬	
	立山 由生	3年		引分け	山本	
	高木啓一郎	3年		○	鈴木	
	忍足 正彦	4年		縦四方固め	コバセツチ	
	植松 修一	4年			伊藤(加)	
	佐藤 隆夫	4年			伊藤(和)	
	小田切祐治	3年		○	山下	

■第27回 全日本学生柔道優勝大会 昭和53年6月11日 日本武道館

1回戦	シード					
2回戦	本塾	2	-	1	大阪商業大学	
	忍足 正彦	4年		引分け	藤本	
	立山 由生	3年		引分け	師井	
	高木啓一郎	3年	⊕	警告	東	
	羽島 信	3年		引分け	田畠	

3回線	佐藤 隆夫	4年	引分け	井 上	ベスト16
	植松 修一	4年	すくい投げ	谷 山	
	近藤啓一郎	3年	小外刈り	水 野	
	本 塿	0	-	筑波大学	
	羽鳥 信	3年	大内返し	高 野	
	植松 修一	4年	内股	青 山	
	忍足 正彦	4年	縦四方固め	松 井	
	佐藤 隆夫	4年	引分け	鈴 木	
	小田切祐治	3年	内股	藪 根	
	近藤啓一郎	3年	内股すかし	小 山	
	高木啓一郎	3年	小外刈り	山 崎	

■対東京大学戦 昭和53年6月22日 日吉体育館柔道場

本 塿	2人残し	○	-	東京大学
鈴木 武	2年		引分け	長 野
竹内 弘平	1年		引分け	寺 尾
内苑 孝美	1年		引分け	岡 村
相馬紳一郎	2年		引分け	大 作
千葉 武	2年		引分け	戸 梶
真鍋 祐一	2年		引分け	谷 村
富永 吾郎	2年		十字固め	中 里
羽鳥 信	3年	○	合せ技	中 里
羽鳥 信	3年	○	送り襟絞め	西 山
羽鳥 信	3年	○	崩れ上四方固め	木 野
羽鳥 信	3年		引分け	増 子
加治 秀基	3年		引分け	国 枝
加藤 益夫	2年		引分け	日 出 間
長嶋 康郎	3年		引分け	中 島
小島 裕二	3年		横四方固め	林
平川 宏之	2年		引分け	林
小田切祐治	3年	○	袖釣込み腰	手 塚
高木啓一郎	3年			

■第30回 全日本学生柔道選手権大会東京予選 昭和53年9月24日 講道館

-65kg級	1回戦	羽鳥 信	3年	○	大内刈り	豊 田 駒大
	2回戦	羽鳥 信	3年	●	判定	小 林 亜細亜大
	3回戦	羽鳥 信	3年		判定	東 岡 国士館大
	1回戦	大西 計寿	2年	○	合せ技	勝 山 東農大
-71kg級	2回戦	大西 計寿	2年		小内刈り	喜 多 早稲田大
	2回戦	加治 秀基	3年		判定	白 井 青山学院大
-78kg級	2回戦	島田 靖也	1年		背負投げ	田中(誠) 國學院大
	2回戦	長島 康郎	3年		判定	間 宮 工学院大
-86kg級	3回戦	長島 康郎	3年		棄権	久 保 國學院大
	2回戦	忍足 正彦	4年	●	判定	寺 田 大東大
	3回戦	忍足 正彦	4年		合せ技	生 田 目法政大
	2回戦	高木啓一郎	3年		判定	後 藤 日大
-95kg級	1回戦	大野耕太郎	2年	○	袈裟固め	高 橋 工学院大
	2回戦	大野耕太郎	2年		合せ技	杉 野 東海大
	1回戦	鈴木 和史	3年		判定	梅 野 大東大
	1回戦	立山 由生	3年		大外刈り	西 拓大
	1回戦	植松 修一	4年	○	横四方固め	渡 迂 青山学院大
	2回戦	植松 修一	4年		内股	桜 田 明治大
	1回戦	小田切裕治	3年		判定	田 口 法政大
	1回戦	近藤啓一郎	3年		判定	高 橋 大東大
95kg級	1回戦	加藤 益夫	2年		判定	齊 藤 中央大

■第30回 早慶対抗柔道戦 昭和53年10月10日 講道館

本 勢	5人残し	○	-	早稲田大学	優秀選手：忍足正彦、鈴木和史、大野耕太郎
福本 茂雄	1年		引分け	川上 正治	
大野耕太郎	2年	○	内股	喜多 広	
大野耕太郎	2年	⊖	払い巻き	栗原 大介	
大野耕太郎	2年		関節技	○ 横田 政己	
羽鳥 信	3年		優勢	横田 政己	
鈴木 和史	3年	○	崩袈裟固め	横田 政己	
鈴木 和史	3年	○	合せ技	鹿熊 至	
鈴木 和史	3年	○	合せ技	堀切 博	
鈴木 和史	3年		優勢	○ 渡辺 達也	
相馬紳一郎	2年		内股	⊖ 渡辺 達也	
忍足 正彦	4年	○	締四方固め	渡辺 達也	
忍足 正彦	4年	○	内股	中島 研二	
忍足 正彦	4年	⊖	内股	中西 正美	
忍足 正彦	4年	⊖	内股	八尋 清美	
忍足 正彦	4年	○	返し技	田中 秀道	
忍足 正彦	4年		袈裟固め	○ 後藤久磨生	
千葉 武	2年		横四方固め	○ 後藤久磨生	
佐藤 恵司	2年		引分け	後藤久磨生	
鈴木 武	2年		引分け	林 達也	
近藤啓一郎	3年		引分け	川田 一洋	
大西 計寿	2年		引分け	小田桐憲文	
立山 由生	3年	○	締四方固め	池永 良三	
立山 由生	3年		引分け	戸部 隆治	
平川 典利	4年		引分け	橋本 敏幸	
加藤 益夫	2年		引分け	坪井 晃	
長島 康郎	3年		引分け	内間 次男	
小田切裕治	3年				
加治 秀基	3年				
高木啓一郎	4年				
佐藤隆夫	4年				
植松 修一	4年				

■第4回 東京学生柔道新人優勝大会 昭和53年11月4日 講道館

1回戦	本 勢	0	-	3	明治大学
	大西 計寿	2年	合せ技	○ 鈴木	
	加藤 益夫	2年	引分け		一沢
	大野耕太郎	2年	内股	○ 薦田	
	福本 茂雄	1年	引分け		古川
	鈴木 武	2年	合せ技	○ 藤原	

■ジュニア東京予選 昭和53年11月19日 警視庁武道館

-60kg級	1回戦	会田 義之	2年	横四方固め	○	森 山	國學院大
	1回戦	真鍋 祐一	2年	不戦勝		神 谷	学芸大
	2回戦	真鍋 祐一	2年	巴投げ		大 友	高千穂大
	3回戦	真鍋 祐一	2年	内股	○	矢 嶋	中央大
	1回戦	三木 崇嗣	3年	大外刈り	⊖	竹 本	専修大
	1回戦	平川 宏之	2年			シード	
-71kg級	2回戦	平川 宏之	2年	判定		今 成	専修大
	3回戦	平川 宏之	2年	上四方固め	○	加 藤	法政大
	1回戦	山下 隆司	3年	不戦勝		薄 山	武蔵大
	2回戦	山下 隆司	3年	大外刈り	○	宮 腰	日本体育大
-78kg級	1回戦	島田 靖也	1年	内股	⊖	佐久間	青山学院大
	1回戦	高木啓一郎	3年	背負投げ		岡 野	明学大

2回戦	高木啓一郎	3年		内股	⊖	岸	国士館大
3回戦	高木啓一郎	3年	●	判定		井	東洋大
4回戦	高木啓一郎	3年		支釣込み足	○	郷	中央大
1回戦	鈴木 武	2年	○	横四方固め		青	上智大
2回戦	鈴木 武	2年	○	体落し		畔	国士館大
-86kg級	1回戦	佐藤 恵司	2年	判定		渡	明学大
	2回戦	佐藤 恵司	2年	判定	●	田	専修大
	1回戦	広畑 向一	2年	内股	○	広瀬	明大
-95kg級	1回戦	福本 茂雄	1年			シード	
	2回戦	福本 茂雄	1年	一本背負い		岡	亜細亜大
	3回戦	福本 茂雄	1年	判定	●	鈴	国士館大
95kg級	1回戦	加藤 益夫	3年	大内返し		金	日大
	2回戦	加藤 益夫	3年	大内返し		寺	大東大
	3回戦	加藤 益夫	3年		⊖	竹	東海大
	1回戦	内苑 孝美	1年			シード	
	2回戦	内苑 孝美	1年	払腰		高	明学大
	3回戦	内苑 孝美	1年	横四方固め	○	橋	
						阿	東海大

慶大、19年ぶりの優勝 “不戦5人、忍足、鈴木（和）が奮闘”

昭和53年10月20日付柔道新聞抜粋

第30回早慶対抗柔道戦は10月10日（体育の日）午後1時から講道館大道場で挙行。20選手の勝ち抜き戦（試合時間は6分、副将8分、大将10分。優劣判定の基準は有効以上）の結果、先鋒から17将までは抜きつ抜かれつ接戦であったが、慶大は鈴木2段が3人抜きで優位に立ち、早大14将渡辺2段が140キロの巨体にものを言わせ2人抜いたが、慶大15将忍足2段が破竹の勢いで渡辺、中島、中西、八尋、田中各2段を5人抜き、後藤3段に抑えられたがこれで大勢を決した。後藤3段は2人抜いて3人目引き分けたが及ばず、慶大はさらに立山2段が1人抜き、大将以下5名を残して第11回（昭和34年）優勝以来、19年ぶり通算5回目の優勝を飾った。

早大（不戦5）○慶大

〈主審松下三郎・副審神永昭夫〉

早慶柔道の快勝に憶う

田岡 協

第30回対抗戦は10月10日春日町講道館で行われ、雌伏18年の塾軍が5人を残して快勝し、吾々先輩も大いに感激した。選手諸君有難う。

先輩と云うものは自らの青春を現役の諸君にダブらせ、試合中は時に身をよじらせ、肩に力を入れ、手に汗を握り、敗れて己の悔恨と、勝って往時の美酒を再現するものである。

今対抗戦を総括的に云うならば塾選手はその持てる実力を存分に發揮して勝つ者、引分ける者共にその責を果しチームワークが万全であったことに対し早軍は前半の劣勢により焦りが見られ必ずしも実力が出せなかつたようで実勢以上に大差の勝敗となつたようだ。これは従来の早慶戦では全く逆のパターンであったと思う。

試合内容についても抜群の成績を挙げた忍足君は勿論、鈴木、大野君の活躍も立派であったが、立山君が2人目引分、その後平川、加藤、長島各2段が早軍大将以下の3段陣をよく喰い止め引分けたのは、古くから塾軍に欠けていた敢闘精神によるねばりで5人を残す快勝となつた原動力であり大いに称賛に値する試合ぶりであった。

石川前部長の塾長就任の後をうけた阪塙部長は先に野球部長就任直後早慶戦に勝ち、リーグ優勝を遂げたゲンの良いツキを柔道部に持ち込んで柔道も今年は絶対に勝つと、やや教祖めいたご託宣に師範の諸先生もあふられ、学生諸君もそれに応えて相当練習したことがその試合内容からもうかがわれた。

吾々先輩は全力を尽くしての敗戦は必ずしも責めるものでなく、ここ一番での踏ん張りに欠ける無気力な試合ぶりが何とももどかしく、後に欲求不満を残し、観戦への足を遠のかせることにもなるのである。

本年は相対的に塾軍有利の戦前評も、阪塙部長のご託宣も半ば眉唾の思いであったことをここに認めその不明を部長、部員諸君にお詫びしなければならないが、仮に早軍が絶対に強く塾軍が本年の如く奮闘してもなお及ばなかったとしても部員の労をねぎらうことはあっても責めることは考えられない。

不戦に終った大将植松君以下の5君及び補欠の5君も髀肉の嘆を託ったであろうがチームワークの勝利を共に喜びをわかつことで酬われたであろう。

早軍大将島本3段はオーダー表にのっていながら出場しなかつたので戦後直接本人に聞いたところ、膝関節を腫らしたと云うことであった。

私が昭和10年の復活第2回の試合直前急性関節リューマチで膝を腫らし40度近い高熱が出て、副将で出場したが2人目ふらふらになって引分け、目が廻る苦しい思い出があるだけに人ごとならずの感で、もし同病であったなら余後心臓へ後遺症が残るので充分自重するよう勧告すると共に最後の早慶戦に文字通り髀肉の嘆の不運を心から同情し慰めたことであった。

島本主将の病欠は早軍の志気に重大な影響を及ぼしたであろうことは充分予想される。出場の機会のなかつた塾選手諸君も島本君の不運に比べればもって慰めとなるであろう。

昭和9年復活した塾予科、高等部対早高等学院、専門部戦も3回をもつて昭和初期の対抗戦と同様、人員数で意見があわず中断したが、当時東都私学柔道界の雄早慶戦戦わざるべからずの声に漸やく昭和15年始めて全早慶柔道対抗戦の約が成り、爾來戦中、戦後の空白9年がつづいて今年30回を迎えたわけである。

この間早の24勝、慶5勝で1分、塾軍は尚多くの借があり、今後の試合においても本年の如き気魄を一層磨き対抗戦に応しい戦績となるよう選手諸君に引続いての努力と精進を期待してやまない。（三田柔友会 副会長）

柔友会報42号より

米国遠征を振り返って

主将 近藤 啓一郎

この度、慶應義塾体育会柔道部は、2月18日から3月9日迄の約20日間に渡り、米国遠征を行ない無事帰国してまいりました。今回の遠征は、米国柔道連盟会長であるヨシ・内田先生のここ数年来に渡る米国への招請に対して、その実施に踏み切ったものであります。そしてその決行を今春2月と決め、実施に踏み切ったことは、塾柔道部にとって誠に嬉しい事であります。さて我々柔道部一行は、成田を後に空路バンクーバーに向かい、さらにシアトル、デンバー、サンノゼ、ロスアンゼルス、ハワイを回り、各地で稽古及び試合を行ないました。試合成績は、デンバーでの対ロッキーマウンテンオールスター戦で8対2、サンノゼにおいては米国チャンピオンである対サンノゼ州立大学戦で6対3、ロスアンゼルスでの対オールロスアンゼルス戦で5対3、8対2、そしてハワイでの対ハワイ有段者会戦で11対10、と全五試合において全勝することができました。バンクーバーを振り出しに我々は、米国の柔道マン達と柔道を通じて交流し、共に肌をふれ、汗を流して、心と心の接触を持つことができました。また各地において、周囲の方々が心をこめて温かく迎えて下さった事は生涯忘ることのできない思い出となるであります。この様なすばらしい物を与えて下さった米国の方々に深く感謝する次第であります。

僅か20日間の遠征ではありましたが、我々塾柔道部員は本当に有意義に過ごし、大変満足致しました。我々は今回の遠征を糧に、今年度の東京学生、全日本の各選手権試合、そして10月10日の来たるべき慶早戦において昨年以上の成果をあげるつもりです。最後に今回の遠征実現の為に、非常に骨を折って下さった三田柔友会の先輩の方々、そして多忙にもかかわらず遠征の前から遠征中迄我々の面倒を見て下さった安藤師範、そして遠征中、いろいろ助言して下さった笠原・阪埜の両団長、山際監督、橋本師範等の皆様には、一言では言い表せない程の感謝の気持ちで一杯です。紙上をお借りして御礼申し上げます。簡単ですがこれにて終わりにさせて頂きます。